

高等学校英語科における授業改善の方策

「自ら学ぶ意欲を高め、個性・創造性を育成すること」が現行学習指導要領の基本理念の一つとなっている。

本研究はこのような考え方にに基づき、学習指導の改善を図ることを目的に平成4年度に開始された。初年度の平成4年には全国の学習指導改善の取り組み状況を調査した。平成5年度には学習指導改善の調査問題の試案を作成し、予備調査を行い、平成6年度には調査問題を完成し、本調査を実施した。

高等学校英語の調査問題では、語彙・文法・和訳等、従来の文法訳読式の問題を排除し、インタラクティブなリーディング力の測定をねらいとした。即ち、スキーマ理論に基づくトップ・ダウン式の考え方を取り入れ、「読み」の過程をプリ・リーディング、イン・リーディング、ポスト・リーディングの3段階に分け、設問も「ストーリーを予測させるもの」(プリ・リーディング)、「場面を立体的に描き、登場人物の心理を理解するもの」(イン・リーディング)、「読んだ後の気持ちや感想を述べるもの」(ポスト・リーディング)とした。

このように構成した調査問題を昨年度、5校、5クラスの1年生213人を対象に実施したところ、「ストーリーを予測する力」「場面や情景をイメージする力」「自分の考えや気持ちを述べる力」が弱いことが分かった。予想されたことではあるが、一字一句にとらわれるあまり、書き手や登場人物の考えや気持ちをくみながらインタラクティブに読めないことが明らかになった。

「書き手の気持ちをくみながらインタラクティブに読む力を養成すること」は現行学習指導要領でも求められている。旧学習指導要領の「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「英語ⅡB」の目標は

「事柄の概要や要点をとらえながら英語を読む基礎的な能力を養う」となっていた。それが、現行学習指導要領の「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「リーディング」では

「書き手の意向などを理解し、自分の考えなどを英語で表現する基礎的な能力を養う」となった。

「事柄の概要や要点」はストーリーの中に入り込まずに、外から傍観的に眺めるような態度で読んでもつかめるが、「書き手の意向を理解し、自分の考えを述べることは、背景的知識を駆使してストーリーの予測をたてたり、情景を立体的にイメージしたり、登場人物の立場に立って考えたりしなければできない。つまり、ストーリーの書かれているテキストと積極的に関わることなくして不可能である。

本研究の最終年度である本年度は、昨年度の調査問題の結果と現行学習指導要領の

考え方を踏まえ、インターラクティブな読解力を養う指導方法の開発に取り組んだ。3人の研究協力員には、スキーマを働かせ、書き手の意向をくみとり、自己表現させる読みの指導方法と活動を工夫するようお願いし、実際に授業で実践してもらったこの収録はそれをまとめたものである。

永村先生は、教科書の1課の内のワンセクションの扱い方、テキストの種類に応じた読み方の指導、音読の指導に焦点を当てた。

桑原先生は、プリ・リーディング段階に焦点を当て、背景的知識の活性化を図る方法の開発、テキストの内容理解に不可欠な語彙の拡充・定着を図る方法の開発を試みた。

高橋先生は、ポスト・リーディングに焦点を当て、読んだ内容に対して自分の考えや気持ちを表現させる指導方法の研究に取り組んだ。

3人の研究協力員には、教科書の1課全体の指導方法、および1時間の授業の指導方法という2点からほぼ1年間かけて総合的に研究してもらった。紙面の関係で研究の全体を詳細に載せることはできないが、研究の概要と中心的な活動について理解していただけると思う。

3人の研究協力員の実践研究を一人でも多くの方に読んでいただき、それが糸口となって校内研修が活発になり、授業改善が図られれば幸いである。